

つながりを考える ～陸前高田と私たち～

佐藤文香・井手菜摘

お茶の水女子大学

概要：本研究では、大学在学中の陸前高田とのかかわりを通して抱いた「もやもや」の正体を明らかにして今後のかかわりかたを見出すことを目的とする。またそれを通じて、陸前高田という地域・場所のこれからの姿について考察する。

1. はじめに

大学生活を通じて訪問を続けてきた陸前高田に対し、次第に愛着が強まる一方で、どこかに地域との距離や、自分の関わり方に対する限界、課題を感じたことが研究のきっかけである。地元の方々と交流し、現地の美味しいものを頂き、訪問して元気をもらう度に、ふとした瞬間に冷静になって自分が「3.11 の陸前高田」を忘れてしまっていることに気がつく。「おいしい、楽しい、人が温かい」以前にもっと忘れていけない根本的なものがあるはずで、時折自分が何を以て陸前高田と「かかわって」いるのか、考えさせられることがあった。いくら関わっても私たちは「外部者」でしかないのだろうか。私たちを温かく迎えてくれると同時に、時に「よそ者」とも感じさせる地域共同体の強さは、何に由来しているのだろうか。そうした問いが生まれてきた。

そこで、本研究では、陸前高田で地域に根ざして活動する組織の一つとして消防団に焦点を当てることから、地域のつながりがいかにして生まれるのか、そしてそれはどのような可能性・課題を持っているのか、団員たちへの聞き取りをもとに考察する。さらに、「外部者」の存在は地域の共同性にどのような影響を及ぼしているのか、様々な立場の「外部者」の中でも、自分と同じ学生という立場に関わる人に焦点を当て、その役割や課題、可能性を見いだす。なお、本稿における外部者の定義は「東日本大震災以降に陸前高田にかかわりはじめた人」とする。

以上の考察を通じて、「内部者（＝共同体）」対「外部者」といった垣根を超えた地域とのかかわりについて、新たな捉え方を見だし、今後の自分たちのかかわり方を含め、陸前高田のこれからの姿について考えたい。

2. 陸前高田とのかかわり

佐藤は 2013 年 5 月に大学の実習で初めて訪問したのをきっかけに、年に 2, 3 回陸前高田を定期的に訪問し、8 月に市内で行われるうごく七夕まつりには大学 1 年次から毎年参加している。陸前高田で学んだことを発信・実践すべく、大学で疑似避難所体験を企画したり、陸前高田ドキュメンタリー「あの街に桜が咲けば」の上映会を実施した。

井手は大学 2 年時に実習で初訪問した際に出会った「若興人の家」で約 2 年活動を続けた。「若興人の家」は陸前高田市の地域課題解決のために活動している一般社団法人 SAVE TAKATA の一事業である。主に首都圏の学生が主体となり、土日や長期休みを使って定期的に陸前高田市を訪れ、定住者の創出の前段階として「陸前高田市の交流人口の増加」をミッションとし、様々な活動をしてきた。井手は 2014 年 6 月から団体とのかかわりを始め、2015 年度はリーダーを務めた。

3. 消防団から見る地域共同体の在り方（佐藤）

消防団という一つの組織から「つながり」を考えると、そのつながりは自然にそこに在るものではなく、その共同体を緊密な信頼関係で結ばれた、居心地の良い「場所」として構築するための実践の繰り返しによってつくられていったものである。消防団においては、その場所を構築するための実践として、操法訓練やお酒の場が大きな役割を果たしていた。このつながりは、その構成員に安心感や安定感をもたらす一方で、時に公私の境界をもあいまいにさせるほどの拘束力・強制力を持ちうるという両面性がある。

それに加えて注目したのは、消防団という陸前高田の共同体の一つの中に今起きている「揺らぎ」である。団員たちはそれぞれ生まれ育った土地に根付き、その土地を守ろうとする意識を持っていた。つまり、消防団は「土地」に深く根ざした、「土地」を基盤とした共同体だったのである。ここでいう「土地」とは、単なる自然環境や、個人の経済的所有物としての不動産などを指すのではない。そこに生きる人々にとって生活手段であり、生産手段でもあるものだ。それは人々が先祖から引き継いだ空間であり、人が働きかけて生産・生活を行ってきた、人と人、人と土地の相互作用の歴史的蓄積の産物である。そしてそれはこれからの世代に引き継いでいくことが期待されている。消防団がこのような意味での土地を基盤とした組織だからこそ、土地の喪失はその共同体の存在の基盤を揺り動かすことにつながる。特に各分団の再編成に関しては、地区ごとにその土地に根ざして活動し、長い間をかけて築き上げてきた各分団・部のつながりを解体し、また一から新たな分団・部でつながりを作っていくことを意味し、所属する分団・部に強い愛着・こだわりを持つ団員たちに複雑な思いを抱かせている。

ここで陸前高田という地域に戻って考える。陸前高田は、海と山の豊かな自然に囲まれ、水産業・農業が盛んなまちである。陸前高田には、周辺の釜石や大船渡と比較するとそれほど大規模な製造業の事業所がない。それは外部の人間が流入する機会が比較的少なかったことを意味する。陸前高田は水産業や農業などの一次産業で、ある程度「自立」してまちを成り立たせていたのである。このことは、まちのつながり、住民同士の結束をより密なものにすることにつながった。

人々はその土地で生まれ育ち、生産し、何世代にもわたってその土地で生きる。周囲に住む人々との関係性も「その日限り」「その場限り」のものではなく、長期にわたることが前提となるからこそ、日々の生活において互助制度などによる助け合い・支え合いが生活の基盤となっており、その関係性が緊密なものとなっていた。つまり、土地を基盤として地域の人々の関係性が結ばれ、日々の暮らしが成り立っていたのである。このような関係性が緊密なものであるからこそ、地域の人だけが共有しているものが多くあり、「阿吽の呼吸」とも言えるような日々の生活の在り方がそこには存在していたといえる。

その中で起きたのが震災である。震災によって、人々は生活の基盤であった土地を喪失した。家を流されてしまったことによってそれぞれ住み場所を移転し、住民がばらばらに散ってしまった地区もある。また、自分の土地が流されたことで、漁業や農業などのこれまで行ってきた生産活動ができなくなってしまった人もいる。土地を基盤として、生産や交換関係を含む、その密なつながりがつくられるということは、その基盤である土地を喪失することでその関係性が衰退していくことを意味する。震災は、土地を基盤として生活していた陸前高田の人々の暮らしに大きな影響を及ぼした。

また、「転出者」が多くいる一方で、ボランティアや支援者などいわゆる「外部者」が多く流入するようになった。これまで地域の密な支え合いによって成り立っていた地域の中に、「外部者」が入ってくるということは、時にその「阿吽の呼吸」とも言えるような陸前高田の生活のリズムを乱すこともあったと推測する。震災という出来事が陸前高田にもたらした変化はとてつもなく大きかったであろう。

「土地」の喪失は、陸前高田という地域に揺らぎをもたらしている。それに加えて多くの外部者が流入することで、その揺らぎはさらに大きくなっている。しかし冒頭に述べたように、共同体のつながりは自然に「在る」ものではなく、「生成する」もの、つくっていくものである。だからこそ変わっていく可能性も秘めている。したがって、いま消防団にそして陸前高田全体で起きている「揺らぎ」は、それまでの「つながり」の在り方が変わり、新たな「つながり」が創出する「可能性」でもあるのではないか。

4. 外部者としての学生の可能性と課題（井手）

一人の人の中には、たくさんの気持ちがある。浮き沈みがあり、矛盾もある。自分の矛盾に、自分自身で気がついたとき、どうしていいのかわからなくなるのだと思う。どうしようもない、やるせないことに対して、ちっぽけなことならば、残念だなあとか、ショックだとか、気軽に言うことができるのだと思う。でも、経験していなければ想像できないほど、想像するしかない、想像すらできないほどたくさんのもの、ことを一気に失った陸前高田では、気持ちを口に出すことすら簡単にはできないのだと感じた。

このように、どうしていいのかわからなくなっている、または、状況を受け入れようとはしているが、苦悩や葛藤、個人の中での矛盾を持っている人々が陸前高田にはたくさんいる。そういった人々が集まったり、話したりするときには、心に抱えているものを全て言葉にするわけではない。かといって、相手の心を推し量るだけの余裕も持っていない。だから、すれ違いが起きたり距離が生まれたりする。この、すれ違いや距離のことを「すきま」と呼びたい。私は、学生がこの「すきま」を埋めるきっかけを作ったり、すきまを埋める後押しをする可能性を持っていると考えた。Bさんは「なんかできるかもしれないというすごい可能性があるんだよ。で、大人の人たちも、今までその世代の人たちがいなかったからなんだけど、期待してんだよね。若いエネルギーを、期待してます。」と語る。すきまは結局のところ、自分自身で埋めないと埋まらないものであると考えている。しかし、何かきっかけや、新しい視点がないと、いっこうに埋まらない、あるいはとても時間がかかるものであるのだと考える。そしてそのきっかけを作ることが学生の役割ではないだろうか。

一方で、学生の課題については「来てくれるだけでいい」という言葉に表れていると考える。これだけ様々な団体、学校が活動をしている中で、その活動内容、活動成果については目立ったものが挙げられない。その理由についてCさんは「個別の内容、プロジェクトをもっと効果的にするっていうのであれば、関わる主体を増やしたり、いろんなところにまあ頼ったりとか、頼るためにはやっぱり頼れるような関係築かなきゃないし、その人のやりたいこととか知ってなきゃないしさ。」「なぜかという、陸前高田に置いてく成果物はどんな形であれ陸前高田の人たちが何か使う物とかのために何かっていうものだから、そこにはもっと住民の意見であったりとか、住民の主体性みたいなものが入り込む余地があるような関わり方が求められるんだろうなと。」と語った。

では、これからの陸前高田において、どのような新たな共同性が生まれうるだろうか。報告者の一人井手がかかわった若興人の家の活動を通じて、その活動が形成期であったことから、さまざまな課題とともに幾つかの可能性が見えてきたように思う。

当初私たちは、「若興人の家」という拠点を強みとして活動を進めていた。その後、拠点があるだけで活用できない時期が続いた。そして家の外に活動拠点を移し、人との出会いを求めた。出会いをたくさん経る中で、若興人の家という拠点での交流会ができるようになった。そしてこの交流会の中で、「若興人の家」を共同性が生まれる場所として活用できたと感じられる経験があった。

若興人の家のメンバーそれぞれが出会った人を、ランダムに招待する。誰が来るかは当日までわからない。しかし、来てみるとみんなが実は知り合いだったということばかりだった。一緒にご飯を食べて、おしゃべりをして、少しお酒も飲んで…。陸前高田の顔見知りの人たちが、私たちという外から来て陸前高田に関わろうとする若者たちに聞かせるために、陸前高田について語り合う。その場所で生まれた空気感は、私たちがいたからこそ生まれたあらたな関係性であり、共同性の萌芽であるという自負があった。知り合い同士とはいえ、自分たちがこの場所に招待しなければ、一緒にご飯を食べる機会も、お酒を飲む機会も、陸前高田について語り合うこともきつとなかっただろう、という感覚。これも「すきまをうめる」ことにつながったと考えている。

また、若興人の家での椅子作りワークショップでは、地元の人と一緒に一つの物を作り上げるということの価値に気がついた。気仙杉という素材を用いて、さまざまな会話をしながら、椅子という一つの物を作り上げるということが、相互の信頼関係を築くということにつながったのである。ゼロから地元の人と一緒に作り上げた感動は、忘れられない経験となった。地元の人と一緒に作り上げるということについては、Cさんの語りの中でも以下のように指摘されている。「陸

前高田に置いてく成果物はどんな形であれ陸前高田の人たちが何か使う物とかのために何かって言うものだから、そこにはもっと住民の意見であつたりとか、住民の主体性みたいなものが入り込む余地があるような関わり方が求められるんだろうなと」。若興人の家は少しずつだが、この方向に価値を見出していつているのではないだろうか。このようなかわりを続けていくということで、陸前高田において若興人の家という共同体が存在感を増していくと考えられる。

5. つながりを考える～陸前高田と私たち～

外部者のかかわりが深くなればなるほど、「移住者」と同じような悩みが生まれうる。Cさんは、移住者の苦悩を以下のように語っている。「地域に本当深く根ざしたもの、本当にお祭りとか、そういったものだとかと特にあるかもしれない。どこまでいってもまあよそから来た人なので、昔のこともわかんないし、うん、あの一、二年間頑張っても、二年間すげえ毎日頑張ったとしても、そこにびよっと帰ってきた昔いた人の方がすげえ何かこう歓迎されてる風に見えちゃったりもするし、それはあるかもな」。

この問題に関しては、移住者であるCさん自身が作り出している壁でもあることは想像に難くない。壁は絶対的に、いつもそこに存在し続けているわけではなく、あるときには乗り越えられたかのように、またあるときにはとても高く立ちはだかっているように感じられる。さらに、壁を感じるタイミングやその壁の高さは、皆が一樣に感じているものではないのだ。

「内部者」と「外部者」という枠組みをもし二項対立的に考えてしまうと、あくまで外部者は外部者にしかなり得ない。これからの陸前高田において必要なのは、すでに述べたようにその壁を乗り越えて、「外部者」と「内部者」が共同／協働の実践を行なう場所をつくることであろう。さらにそれに加えて必要なのは、内部者／外部者という枠組み自体から脱することではないだろうか。そこで新たな視点を与えてくれるのが、「拡大コミュニティ」という概念である。提唱者の一人である五味壮平によれば、「拡大コミュニティ」とは、「ある地域に居住する人々だけでなく、出身者や過去の居住者、訪問者、そして関心を寄せる人々までを含む大きなコミュニティを、その地域を支える仕組みとして積極的にとらえ、構築しようとする概念である」（五味 2015）。

拡大コミュニティの実現のためには、協働をめぐる「外部者」の努力と「内部者」の変化の双方が必要不可欠である。それを考えさせる一つのエピソードを紹介する。

一見すると外部者に対してとても友好的であると感じ取れた地元住民Bさんの語りである。Bさんは、仲良くやるためには「優先順位を間違えないことですね」と話していた。Bさんの語りが示唆するのは、「内部者」と「外部者」が協働をめざす中で、「外部者」が配慮しなければならない「内部者」の繊細さだ。ここには二つの意味があると考えられる。

第一に、拡大コミュニティは、「外部者」に対してコミュニティを広げていくというように捉えられがちだが、実は「転出者」もその一員として含まれること（五味 2015）、そして第二に、そのことを内部者である「在住者」自身が強く意識し望んでいることである。こうした「内部者」の心情への配慮を欠いたとき、「外部者」と「内部者」の協働は、円滑に進まなくなってしまう可能性がある。

第3部で述べた若興人の家の実践は、拡大コミュニティの実現のステップとしても位置付けることができるだろう。若興人の家では、震災後、様々な学生が蓄積したたくさんのつながりを広げながら、新たな出会いや信頼関係を築いてきた。このように、陸前高田の人々が、外部者を受け入れていくというこれまでにあまりなかった経験を身近なものとして捉えられるようになれば、それは新しい共同性を生み出す経験として陸前高田の人々と地域社会の中に蓄積されていく。現段階では、このような経験を作り出すために「内部者」と「外部者」とをつなぐためのサポートをする人や場所が不可欠である。拡大コミュニティ構築のための実践は容易なことではない。しかしこうした実践を続けていくことで、双方の間に経験が蓄積され、それぞれが互いに持っていたハードルは少しずつ低くなっていくのではないか。この「内部者」「外部者」という意識レベルでのハードルが無くなり、自然と交流が進んだときに、拡大コミュニティが真の意味で成り立つと言える。これこそが、私達が考える、今後の陸前高田という地域の在り方であり、拡大コミュニティという地域とのかかわりの在り方である。

卒業して社会に出る私たちのこれからの役割をここに見いだすことができる。これまで私たちは、「学生」という立場に守られていた。それは大学や、教員や、団体などのサポートがあつてこそのものであった。これからは私たちも、一個人としてのかかわりが求められるだろう。

私たちは、陸前高田を何度も訪れる中で、想像することの大切さと難しさに気づき、うまく言葉にできない「もやもや」を抱えた。初めて陸前高田を訪れた時には、とにかく考えるきっかけを与えられすぎて、どう向き合い、自分には何ができるのかわからなくなる。それらを処理するには時間も必要だし、処理するために苦しむことに意味があるとも思う。その中で様々な出会いがあつて、少しずつ信頼関係を築いていくことに価値がある。しかし、私たちは震災前の陸前高田を知らないし、震災を陸前高田で経験していない。しかしこの「想像するしかない」立場の外部者、学生として陸前高田に入り込んできた経験は、私たちにしか伝えていくことができない。そこが、つながり続けてきた私たちの強みであると考えられる。

これまで多くの人のサポートの基に築かせてもらった信頼関係を、今度は私たちがサポート側に回って後輩に繋いでいくということこそ、私たちがこれから陸前高田にどのようにかわるかということの一つの答えだ。

参考文献

- 後藤一蔵 (2001) 『消防団の源流をたどる—二十世紀の消防団の在り方—』, 近代消防社
 吉原直樹 (2008) 『防災の社会学』, 東信堂
 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』, 講談社現代新書
 石田光規 (2011) 『孤立の社会学』, 勁草書房
 宮口侗迪 (2010) 『若者と地域をつくる』, 原書房

内山節（2010）『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』，農村漁村文化協会
五味壮平（2016）「岩大 E_code の活動を通じて考えること」

岩手大学三陸復興サポート学生委員会における陸前高田市での活動

鈴木光¹・伊藤大¹・藤本陽之¹

¹岩手大学

概要：岩手大学三陸復興サポート学生委員会では陸前高田市と釜石市で活動を行っている。陸前高田市では高田町和野地区と矢作町下矢作地区でコミュニティ形成支援と、矢作町では NPO 法人パクトと連携して子ども支援を行っている。また釜石市では NPO 法人@リアスと連携し二か所の仮設住宅でサロン活動も行っている。本稿では陸前高田市での活動を紹介する。

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受け、当時の農学部共生環境課程の学生がもりもり☆岩手という団体を立ち上げた。震災直後は色々な地域で復旧活動をしていが、復旧が進むにつれて求められるニーズが変化し、子ども支援を行うようになった。2013 年 10 月にもりもり☆岩手を含めたボランティア委員会が立ち上がり、翌年 4 月に大学公認の委員会となり、委員会名が岩手大学三陸復興サポート学生委員会になる。ここでは委員会が行ってきた陸前高田市高田町和野地区と矢作町下矢作地区でのコミュニティ形成支援と矢作町での子ども支援活動について紹介する。

2. 高田町和野地区での活動

この地区は津波が来なかった地域であり、高台移転してくる方々が多い地域である。現在、既存住民と新規住民の間に関わりがないことが懸念されている。そこでよそ者かつ若者である学生が地域に入ることにより関わりを作ることができるのではないかと考え、以下の行事の手伝いを行っている。

- ・和野権現舞（1 月）
- ・動く七夕（8 月）
- ・夏祭り（9 月）
- ・上和野地区まちづくりワークショップ（12 月）

1 月に行われる和野権現舞は、一軒一軒を回り虎舞を行うことによって、一年の無病息災を祈るという行事である。この祭りで学生は、男子学生は住民とともに虎の中に入り虎舞をし、女子学生は子どもたちと舞をする。

8 月 7 日に行われる動く七夕は、鎮魂の意味が込められており、昼の部と夜の部の 2 回で町内を回る。学生は、祭りの引手となり祭りを住民と盛り上げる。当日だけの参加でなく、週末に行われていた山車の準備にも参加した。

9 月に行われる夏祭りは、震災前から行われていたが、一昨年震災後初開催となった。学生は祭りの手伝いと出し物をし、祭りを盛り上げた。

12 月に行われるまちづくりワークショップは、上和野町内会が主催で行っている。ワークショップで住民同士での交流と、地域の防災に関する課題を話し合うことを目的としている。学生はワークショップの進行役と書記を行い、ワークショップの手伝いをした。

上記の活動は東北大学と神戸大学と連携して行っている。

3. 矢作町での子ども支援活動

子ども支援活動として、NPO 法人パクトと連携してみちくさルームを行っている。もりもり☆いわてのときから行っていたこの活動を、委員会でも継続している。この地区の子どもたちは、小学校の校庭に仮設住宅が建ったため、校庭で遊べない状況になっており、道路では復興の工事のためにトラックや工事用車両が走っており、外でものびのびと遊べない。そこで、子どもたちがのびのびと遊べる場所を作ろうということでこの活動が始まった。活動内容としては、月に一回地域のコミュニティセンターを借りて開催している。また、みちくさルームは矢作町だけでなく、陸前高田市内の三か所で行っており、それぞれに岩手大学以外の大学が携わっている。毎年春には、みちくさルームに参加している大学生とパクトで交流会を開催しており、来年の春にも交流会を行う予定である。

4. 矢作町下矢作地区での活動

みちくさルームで活動を行う中で、仮設住宅に住んでいる子どもとそうでない子どもの間に壁があるように感じ、子どもたち同士をつなげる活動を行ったのは始まりである。その活動を通して、地域のコミュニティ活動の中心である住民から、震災復興の一環として今まで開催されていなかった「下矢作灯籠七夕」を復活させる準備をしているという話を聞いて

た。学生がお祭りの復興に関わることで住民同士や子どもたちと地域を結ぶ重要な役割を果たすことが出来るのではないかと考え、お祭り復活の手伝いをしている。学生は祭囃子である笛と山車の引手として参加している。平日に行われていた祭囃子の練習にも参加することによって祭り当日だけでなく、学生と住民の関係づくりにも励んだ。また、この活動を行うために yahoo から助成金を頂いた。

5. 今後の展望

これからも陸前高田市における活動を続けていきたいと考えている。しかし、震災から 5 年の歳月が過ぎ、被災地の現状やニーズが変化してきている。そのため、これまで行ってきた活動を見直し、これからの被災地、またそこでの活動、今私達学生に何ができるのかを考えて行きたいと思っている。

『グスコーブドリの伝記』を例とした賢治の理想世界 —被災地の今・陸前高田より—事例報告

The Life of Gusko Budori as an example of Kenji Miyazawa's ideal world

From Rikuzentakata—the disaster-stricken area today: A case study report

大須賀 匠¹

¹ 東京農業大学総合研究所（両角和夫研究室）

概要：2016 年は賢治生誕 120 年にあたり、20 代以降に書かれた作品が今後 100 周年を迎えていく。そこで本研究は『グスコーブドリの伝記』に着目し、作品中の火山と潮汐発電への思考が 100 年後の今、どのように展開されているかその実態を探った。具体的には岩手県陸前高田市（生出地区）で実証実験中のバイオマス発電（木炭水性ガスと水車エネルギー発電）との関連性を比較し、賢治の描いた理想世界の体現を検討した。

abstract: This year, 2016, marks the 120th anniversary of Kenji Miyazawa's birth. Going forward, we will be celebrating the 100th anniversary of works he wrote in his 20's and later. Therefore this study focuses on *The Life of Gusko Budori* and investigates how ideas about volcanic and tidal power in the book have developed today, 100 years later. More specifically, the author examines the realization of the ideal world depicted by Kenji, by comparing its relationship to biomass power generation (charcoal syngas and waterwheel energy power generation) demonstration experiments underway in Rikuzentakata city, Iwate Prefecture.

1. 背景

- ・2016 年は宮沢賢治生誕 120 年であり、賢治が 20 代以降に書いた作品が今後 100 周年を迎えていく。
- ・賢治がめざした理想世界“イーハトーブ”の意味を問い返すことが求められている。
- ・『グスコーブドリの伝記』の世界観に着目。岩手県陸前高田市（生出地区）で実証実験中の再生可能エネルギーによる発電システムとの親和性を検討する。

2. 本講演のテーマ

- (1) 『グスコーブドリの伝記』の作品世界（以下、ブドリの場合と表記）と、岩手県陸前高田市（生出地区）で行われている再生可能エネルギーによる発電システム（以下、生出の場合と表記）との親和性の比較検証
- (2) 実地調査による、賢治の作品世界の存在の確認

3. 発電システムの親和性の比較検証について

- (1) 社会問題の喚起

① ブドリの場合

- ・『グスコーブドリの伝記』の中で賢治は、当時の社会問題として、冷害や旱魃（かんばつ）などの自然環境の影響による飢饉問題をとりあげた¹⁾。

② 生出の場合

生出地区の発電システムの目的

- ・地域資源を有効に使い発電することで、地域社会に新たな価値を生み出すこと
- ・山を適時手入れすることで、地域の自然に活力を戻すこと

*自然と人間社会を「共生」というキーワードで結ぶ実証実験の取組み。

③ 社会問題の取組みの親和性

- ・ブドリの取組み：“冷害や旱魃（かんばつ）”の解決
- ・生出の取組み：“間伐（かんばつ）”の解決

*社会問題に対し果敢に挑戦する姿勢には、共通性がある。

- (2) 発電システムの比較

① ブドリの場合

- ・地熱発電所（アニメ映画版）と潮汐発電所（原作）²⁾

② 生出の場合

- ・発電システムその 1：間伐材による木炭発電^{3) 4)}

設備：木炭燃料水性ガス発電機 1 台 * 移動車両型発電機

(生産能力：最大 4.8kw、2 時間の連続稼働可能)

仕組み：間伐材で木炭を作り、木炭の燃焼により発生する水生ガスを動力源として、別に設置したオルタネーター（発電機）を自動車のエンジンで回し発電する

- ・発電システムその 2：水車による小水力発電^{3) 4)}

設備：水車発電機 1 台

(生産能力：最大 0.5kw、24 時間稼働可能)

仕組み：気仙大工による水車を作り、川の水流により発生する回転力を動力源として、発電機を回し発電する。

③ 発電システムの親和性

- ・比較調査の結果、自然がもたらす山と水の恵みを人間が持続的に利用する再生可能エネルギーの視点から、両者の発電の考え方に共通性がある。

(3) 地場産業（養蚕業でぐす）の親和性

① ブドリの場合

賢治は、当時の岩手県内で盛んであった養蚕業について描写していた⁵⁾。

② 生出の場合

- ・生出周辺地域の歴史文献調査により、この地区には『グスコブドリの伝記』に登場するような製糸工場がかつてあり（1894～1933）、当時の養蚕業を支えた水車と木炭エネルギーが今、発電システムの原動力としていかされていた^{6) 7)}。

(4) 発電システムの親和性の比較検証の結論

- ・陸前高田市（生出地区）には『グスコブドリの伝記』と親和性のある世界観があり、賢治の理想が一部に体现された現代のイーハトーブとして捉えられるものと考ええる。

比較表 1：再生可能エネルギーを利用した発電システム

	グスコブドリの発電システム(1932年当時のイーハトーブ)	生出地区の発電システム(2016年現代のイーハトーブ)
研究目的と取り組む社会問題	旱魃(かんばつ)や冷害に対処する科学や農業技術を学び、飢饉問題に対処すること	間伐により、自然環境を修復し再生化する科学や農業技術、環境ビジネスの手法を学び、荒廃する自然環境問題や地域の活性化に対処すること
学問の領域	農学	農業経済と環境問題
活動テーマ	飢饉に苦しむ住民の救済	荒廃する自然環境から、人間をはじめとするすべての生き物の救済
発電の世界	賢治作品の中の空想世界【グスコブドリの伝記の世界】	賢治作品を通じた現実世界【グスコブドリの“電気”の世界】
主要発電システム	地熱発電(アニメ版)と潮汐発電(原作)	木炭発電と水車発電
発電システムの目的	窒素肥料の雨を人工的に降らすこと	再生可能エネルギーによる電気作りを人口に膾炙させること(地域創生ビジネスにつなげる)

4. 実地調査による、賢治の作品世界の存在の確認

(1) 発電システムの概要、および稼働状況の現地調査

(調査日：2016 年 7 月 16 日、7 月 23 日)

(2) 『グスコブドリの伝記』の世界観以外に、賢治作品の世界観を彷彿させる内容

① 木炭による発電装置

- ・親和性のある作品：「風の又三郎」^{8) 9)}

② 水車力による発電装置

- ・親和性のある作品：「雨ニモマケズ」

(3) 実地調査による、賢治の作品世界の存在確認の結論

- ・陸前高田市（生出地区）には『グスコブドリの伝記』と親和性のある発電装置が実際にあり、稼働していることが確認できた。
- ・さらに発電装置は、『グスコブドリの伝記』だけでなく、他の賢治作品との親和性も感じとれる内容であることから、賢治作品の世界観が存在するものと捉えることができた。

比較表 2：再生可能エネルギーによる発電システムの取り組み

フェーズ	グスコブドリの発電システム	生出地区の発電システム
① 社会問題への挑戦	旱魃(かんばつ)や冷害を主因とする飢饉問題に対処すること	荒廃する自然環境問題や地域の活性化に対処すること
② 自然をいかしたエネルギー開発	潮汐発電システムを開発し、沿岸部に設置(200か所)	木炭発電システムを開発し、山間部に設置(2か所)
③ 新産業の普及活動	窒素肥料の雨を人工的に降らすこと	未実施
* 新産業への住民の反応	旱魃(かんばつ)だってちっともこわくなくなる(ペンネン技師) 家じゅうみんな悦んでいる(ネリ) * 肥料の調整について住民の一部に誤解があり、技師が暴漢に襲われた	* システムが一部に知られているだけで、住民の反応は少ない(2016.8)

5. 今後の展望（賢治作品の世界観を今後どう活かしていくか）

活動テーマ：地域住民が参加して作る、新たな民話（現代版・イーハトーブ童話）の創出と伝承活動の提案

（1）企画概要

- ・陸前高田にある“氷上山”が舞台となっている、宮沢賢治原作の『雪わたり』の100年後の世界を描いた、被災地・陸前高田の復興ものがたりを創作する。未曾有の震災を経験したことで、自然と人間の共生の大切さに気づき、自然の生き物も人間も、みんなで力をあわせ協力して陸前高田の復興活動に取り組んでいくストーリーを検討中。

（2）活動の目的、狙い

- ・再生可能エネルギーの紹介（環境教育）と、今回の津波の経験（防災教育）をふまえた郷土の歴史教育を避難訓練時に実施する。その際に、本書を配布し活動を展開していく。
- ・今後さらに、地域住民による震災の記憶や未来への希望を童話に盛り込み、現在進行形の物語りとして、後世に伝承させていく。

（3）本書の特徴

- ・郷土にゆかりの宮沢賢治の童話『雪わたり』の作品世界を現代にいかすもの。
- ・『稲むらの火』の原作者であり教育者でもある小泉八雲の思想（人間と自然の共生のありかた）を盛り込み、自然災害の伝承読本としての伝統を引き継ぐもの。
- ・仮想の世界を舞台としながら、現実世界の事象を記載することにより、子供にも親しみやすく、かつ震災の記録書として機能させるもの。

以 上

引用・参考文献

- 1) 【新】校本宮澤賢治全集第12巻, 筑摩書房, p213
- 2) 【新】校本宮澤賢治全集第12巻, 筑摩書房, p220, p223
- 3) 和田清美『陸前高田市生出地区における木質バイオマスならびに水力エネルギーの持続的利用と循環型地域社会システムに関する研究 博士学位論文』2011, p56-p59, p84-p91
- 4) 両角和夫『農村地域の地域環境ビジネス創出と企業の社会的貢献（CSR）に関する研究序説-岩手県陸前高田市を中心に-』2014, p287-p288
- 5) 【新】校本宮澤賢治全集第12巻, 筑摩書房, p204-p205
- 6) 佐藤龍治『生出ものがたり』1975, p38-p44
- 7) 平口嘉典『山村地域における産業の創出・発展の条件に関する研究-戦前期岩手県気仙郡生出製糸工場を事例にして-博士学位論文』2008, p41-p43
- 8) 【新】校本宮澤賢治全集第11巻, 筑摩書房, p192
- 9) 陸前高田市広田町自主防災会・震災記録製作委員会編『広田の未来(あした)に光あれー平成23年3月11日 平成三陸大津波 広田町の記録』陸前高田市広田町自主防災会・震災記録製作委員会, 2013, p51

講演者紹介

大須賀 匠：東京農業大学大学院農学研究科環境共生学専攻の社会人学生, 2014 年より再生可能エネルギーのあり方をテーマに陸前高田にて普及活動に取り組む。

住所：〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号, E-mail:takumi3901@gmail.com

岩手大学心のケア班復興支援活動報告

A Report about Psychological Care by the team on Iwate University

佐々木 誠

岩手大学

概要：本稿では、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構心のケア班による東日本大震災への心理支援活動の報告と考察が目的である。はじめに、復興支援として心のケア班が行う心理支援活動全体を示し、次に岩手県釜石市にある岩手大学釜石サテライトを拠点とする活動について述べる。活動の特徴は、現地駐留型の支援、支援者への支援、一般を対象とした心理教育、カウンセリング、臨床心理士の育成、心理学的基礎研究である。これらの活動報告を通して、災害における長期的な心理支援の必要性、広報活動や研修活動における被援助性を高める工夫、そして今後の支援のあり方について述べる。

abstract： The psychological support activities, for people whom affected by the East Japan great disaster, by the care squad of the Organization of Revitalization for Sanriku-region and regional development in Iwate University are reported in the study. First, the psychological support activities as reconstruction assistance, conducted by psychological care squad are described, and then, the activities based in the Iwate University Kamaishi Satellite in Kamaishi-shi, Iwate prefecture are explained. The characteristics of the activities are locally-based assistance, support for supporters, psychological education for the public, counseling, nurturing clinical psychologists, and psychological fundamental research. Through these activities, the necessity of long-term psychological support in the disaster, the contrivance for people who raises cover help characteristics in public work and the training activity, and the support in the future are discussed.

1. はじめに

東北地方太平洋沖地震（2011年3月11日）とその津波による災害の発生以来、岩手大学では沿岸地域における復興支援活動を行なってきた。危機対策本部として学部の枠を超えた組織体制から発足し、翌年は三陸復興推進機構へ改編され、大学の恒常的組織として位置付けられた。6年目を迎える本年（2016年度）は三陸復興・地域創生推進機構となり、時間の経過とともに得た多くの経験を知見として活かす役割も強化された。心のケア班は機構の実践領域の三陸復興部門に属するチームとして「被災者と支援者の長期的な心のサポート」をテーマとして継続した活動を行っている。筆者は、支援スタッフとして2012年3月より岩手大学が釜石市に設置している釜石サテライトに常駐し活動している。

支援における心のケアとは「その人や集団のもつ回復力を引き出す支援」と考えられている。ケア班がそのような支援を行なっていく上での幾つかの課題がある。

課題1（マンパワー）心のケア班のフタッフは、大学の職員が10名程度と人文社会科学研究科人間科学専攻臨床心理領域の大学院生10名程度であり、講義や日常業務もあるため支援活動に専念できるわけではない。

課題2（移動の困難さ）岩手県は本州で最大の面積を有し、大学から被災地への移動は車で2時間半必要なこと。ただし、冬期はさらに時間と路面状況等のリスクが伴うこと。

課題3（凝集性の高さ）沿岸地域は心理支援の資源（病院や専門施設）が少なく、もともと助け合ってきた地域である。このため凝集性が高い地域（集団意識の強い地域）がある。

課題4（被援助性の低さ）対象地域の人々の特質として、まじめで我慢強いことがある。心の問題はともすれば弱い人間であるというイメージや、支援する人に悪いから、隣の人の方が大変だからと援助を要請しない傾向が強いと思われる。

課題5（個人差・個別性）心理的な問題や事柄は見えにくく、経験を消化し心に収めるにはその人なりの時間の進み方がある。よって、お互いが理解し合うということが難しい事態も考えられる。加えて、時間の経過とともに再建の個別化がすすむことで個人の間に溝が生まれ、孤立感が生じることも懸念される。

これらのような背景から、カウンセリングのような個人内への関わりだけでなく、被災経験の程度やその後の復興の進度、そして心理的な理解の温度差といった複雑や要因の混じりあった集団への効率的なアプローチが必要となってくる。臨床心理士である筆者が、面接室の枠を越えてどのような活動をしてきたのか、そこから臨床心理地域援助のアプローチを考察するのが本稿の目的である。

2. 心のケア班の活動

この5年間で、表1にあるように心のケア班の活動は8つにまとめられる。表は左側に活動項目、右側に上記の課題のどの部分をカバーしているものを課題の番号で示したものである。活動①～⑥は、釜石サテライトが主となっており、活動⑦と⑧は本学のケア班の教員が行っている活動である。活動①は専任スタッフが岩手大学釜石サテライトに常駐し、被災地で行われる会議や研修や仮設の住民との交流の中から情報を収集し、それを参考に支援を計画し実行するものである。活動②は、震災トラウマなど専門的なケアを行うことを目的として、

釜石サテライトの一室を相談室として運営するものである。活動③は、見えにくい心の事に触れる機会を提供し、かつ間違った理解を防ぐことで回復を促進することをねらいに行われる一般市民を対象とした講座の運営である。平成 27 年度は、3 人の教員で 6 講座を開講した。課題④は、仮設団地で見守り活動を行う社会福祉協議会が行うサロンに参加し、リラクゼーション等の実技を行うものである。多くの団体が支援として仮設に入るが、自治会が受け入れ疲れが起こさない配慮として、通常行われるサロンの中の出し物という形態をとった。課題⑤は、自治体職員に比べ一般支援団体のスタッフに対するメンタルヘルスが手薄と感じたため、企業の保健室的な活動である EAP(Employee Assistance Program)を参考に企画したものである。支援団体を対象に、メンタルヘルスに関わる研修、カウンセリング、コンサルテーションをパックとしたプログラムであり、実施の際にはニーズに応じてスキルアップ研修も取り入れた。活動⑥は、長期的支援の土台となる次世代の臨床心理士を育成することである。臨床心理士を目指す人文社会科学研究科の大学院生が実際に被災地を訪問し、復興の様子の見学、仮設住宅に暮ら方々へのリラクゼーション研修の実施、卒業生を講師とした学習会などを通して臨床心理士が行う地域援助の素地を養うものである。活動⑦は、脳の血流を微弱なレーザーで測定といったような微細な体の変化をとらえる機器等を用いて、PISD とイメージの関係等の支援に関わる基礎研究を行っている。活動⑧は、岩手県教育委員会への協力として、ケア班の教員が交代で週 1～2 回程度、沿岸にある 2 つの高校を訪問する活動である。

表 1 心のケア班の活動内容

活 動 内 容	対応する課題
活動① 釜石サテライト常駐による情報収集と支援の立案・実行	1, 2, 3, 4
活動② カウンセリング等相談活動	2, 4, 5
活動③ 市民講座・一般対象の企画等	1, 3, 4, 5
活動④ 仮設住宅訪問支援	2, 3, 4, 5
活動⑤ 支援者に対するメンタルケアプログラム	1, 4, 5
活動⑥ 臨床心理士の養成	1, 5
活動⑦ 心理学的基礎研究	4, 5
活動⑧ 三陸沿岸高校へのスクールカウンセリング支援	2, 3, 4, 5

平成 28 年度は、内陸に避難した方々へのケアも活動の指針に盛り込まれた。これに加え、福島と宮城と岩手の支援者による子ども支援に関わるシンポジウムを開催（平成 29 年 2 月 11 日）する予定である。また、表中の項目に分類されない活動としては、他団体への活動協力、健康に関する企画展示等がある。平成 29 年度は、それまでの活動をまとめるものとして、心理教育テキストの発行を予定している。これらの活動について、平成 24 年～平成 28 年 11 月末までの釜石サテライト常駐スタッフによる対外的活動（講義や会議等の学内の用務を除く）件数をまとめたものが表 2 である。

表 2 釜石サテライト常駐スタッフによる対外的活動件数

	対外的活動件数	うち研修・講演回数 (対象のべ人数)	相談ルーム 面接件数
平成 24 年度	1 4 2	2 6 (約 520 名)	未開設
平成 25 年度	1 7 2	3 7 (約 920 名)	3 8
平成 26 年度	1 6 2	3 6 (約 1,100 名)	6 2
平成 27 年度	1 8 2	3 7 (約 940 名)	1 0 7
*平成 28 年度	9 3	1 4 (約 1,090 名)	4 4
合 計	7 5 1	1 5 0 (約 4,570 名)	2 5 1

*平成 28 年度は 11 月末現在

3. 平成 30 年度からの事業計画

被災地の状況が刻々と変化し、復興に関わる情勢は変化している。各活動の今後の計画として、活動④は、仮設住宅の閉鎖等の状況をみながらではあるが、平成 30 年度終了を予定している。活動⑧は、教育委員会の意向を勘案しながらの判断となる。活動⑥については、指定大学院でもある岩手大学の根幹に関わるものであり、活動⑦と合わせて、最終的には日常の活動の中で継続していくものとなる。他の活動については、今後の推移をみながら対応を継続するかどうか慎重に判断していくものである。

4. 心理支援活動を通しての考察

今回の復興支援では、阪神淡路大震災の教訓を反映して、研究目的のアンケート（特に心理的な尺度と呼ばれるもの）の実施は控えるという動きがあった。つまり、阪神淡路大震災で多くのアンケートを被災者が回答させられることで辛い思いや気持ちを再体験し、二次的な傷つきが発生したということである。そのため、活動の効果検討としてのアンケート実施ははばかれる状況であった。しかし、支援者のメンタルヘルス研修では燃え尽き尺度を教材として用い、その場で採点と評価の方法や、結果の見方について丁寧に解説することで「自分では大丈夫と思っていたが、点数で見ると何かしらのケアが必要だと分かった」等の尺度本来の使用目的が達せられるような使い方では抵抗が起こりにくいことが分かった。つまり、回答の拒否を保証しつつ、丁寧に、その場で回答者自身が解釈できる形として使用する場合には、実施について大きな問題はないことが分かった。

研修の効果については、客観的なデータには乏しいものの、利用者の声としては概ね好評であり、リラクセーション研修では「眠剤（睡眠導入剤）が要らなくなった」等の感想を得ている。また、支援の初期はリラクセーションが多く、2年目からは傾聴の依頼が増えた。これは、リラクセーション等の被災者への支援によって、元気の出た来場者が被災者から支援者に役割を変え、自分たちができることとして傾聴のスキルを身につけるべき、と考えたことによるのではないかと推測している。このことは、心理支援とは受け身の支援ではなく、自分も役に立て、自分の人生は自分でコントロールできるといった自己効力感や自立性が重要であることを物語っている。

カウンセリングについては、初期には震災以前からあった問題がクローズアップされるか震災のストレスによる相談があったが、時間の経過とともに一般的な相談で来談するケースがみられるようになった。後者の場合であっても、話を聞いていくうちに震災やそれに伴う喪失（大切な人を失うこと）が関係していることが明らかになる場合があった。震災の影響はその後の生活のストレスの影に隠れている可能性がある。このことから2つの事が言える。1つは、表面的には落ち着いているように見えても、震災によるストレスが蓄積されて耐性が下がっている可能性があること。2つめは、支援の手法として震災が関係しているかどうかに関わらず、どんな問題でも話を聞く必要があるということである。その点で、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の遅発性と言われるように、時間が経ってから症状が現れるケースがある。現在では専門的な介入が多く研究されており、治らないものではなくなっている。現地の状況に合わせて、新しい介入方法や手法を取り入れるなど、支援自身も研鑽を積んでいく必要がある。

結果として、研修参加者のフィードバックや利用者の正直な感想、そして現地の方々との交流で得た生の声など、支援場面から学ぶことは多く、貴重な財産となっている。よくボランティアにいらした方が「支援に来て逆に元気をいただいた」と言うように、われわれも支援者として育てていただいたと感じている。結果として、アンケートで得られる数値では表されないものを得たと言える。

5. 今後の展望

これまでの活動は復興支援に重点が置かれ、経験をアカデミックな形で結実することはおろそかになっていた。今後は、これまでに得た経験を形として発信していく必要がある。復興活動が終了とされた後にできる事という観点からすれば、支援活動から得た経験を知見とするだけでなく、多くの人に知ってもらう必要がある。そのようなシステムの1つが今回紹介した市民講座であろう。身を守る防災が震災後に熱心に議論されたが、同様に心を守る防災という観点での議論も可能ではなかろうか。

また、PTSDの遅発といった個々への対応として、岩手大学では人文社会科学部のこころの相談センターと、釜石サテライトの心の相談ルームがその役割を担うだろう。例えば、そこで扱われた震災関連の問題を知見とし、大学院生の指導に組み込む。大学院生は、社会に出てその経験を生かし、逆に社会での経験を大学院生に伝えるといった循環的仕組みも現在行っている。これをどうやって継続していくか、つまり復興に関わる活動を普段の活動にどのように組み込んでいくかということを考え、長期的な視野をもったシステムの構築へと生かしていく必要がある。大学の本務として、面接室の中と外で能力を発揮できる人材の育成するという言い方もできる。この課題に 대응することで、次期の支援を担う優秀な人材が育ち、地域にとってはこれからも起こる震災への備えになる。大変だとは思いますが、労力以上に得るものがあるのではないだろうか。

参考文献

佐々木・山口(2013)「岩手の被災者の長期的な心のサポートプロジェクト」、『教育と医学』,第61巻第10号通巻第724号, pp. 45-49, 慶應義塾大学出版会株式会社

著者紹介

佐々木 誠：岩手大学三陸復興・地域創生推進機構特任准教授, 専門は臨床心理学（臨床心理士）。2012年より岩手大学釜石サテライトを拠点とし、岩泉町から陸前高田市までを活動範囲として、心理教育とカウンセリングなどの活動に取り組む。最近では内陸への避難者のケアも行っている。また、教員として臨床心理士を目指す大学院生の指導も行っている。

住所：〒026-0001 岩手県釜石市平田3-75-1 岩手大学釜石サテライト, E-mail: heart@wate-u.ac.jp



